

平成五年十二月十二日 和敬塾予餞会記念講演

「新時代の国際社会と日本」

NHK解説委員 飯田健一先生

皆さん、初めまして。そして四年生の皆さん、卒業おめでとうございます。これから新しく社会に出て、新しい日本の建設のために頑張っていたきたいと思います。

今日は、たまたま私が個人的にご指導いただいている前川塾長から、一度和敬塾へ来て、若い皆さんに、何か国際情勢あるいは日本との関わりについてお話をしようかということと、お邪魔させていただきました。普段私はよく講演会に全国をあちこち飛び回っています。たいていは馬鹿話が多くて、笑わせることに夢中になってしまうのですが、今日は和敬塾という厳粛な場でのお話でもあって、卒業生の皆さんに何かちゃんとした話をしなくてはいけないということ、やや堅苦しくお話しするかもしれないと思いますが、お許しいただきたいと思えます。

今日テーマをいただいた「新しい時代の国際情勢、世界と日本との関わり」という問題ですが、まず、今日の世界は人類の歴史の中でもそう滅多にやってこないくらい大変歴史的な激

動の時代と言っていると思います。

十九世紀の終わりに、世紀末ということがよく言われました。世紀末というのは、来るべき二十世紀という時代を予感するような激動の時代でありまして、二十世紀というのは一体どういう時代なのだろうか、人々が非常に不安を持って時の過ぎるのを待っていました。特にヨーロッパの国々がそのような不安を持っていました。実際にその不安は当たりました。十九世紀には科学が発達しましたし、資本主義が勃興した。多分普通の常識でいえば、二十世紀の人類の生活は、文明の一番発達しているヨーロッパを中心に非常に便利で豊かな世界が来ると考えるのだけれど、人々はそのように感じませんでした。

それは全く的中しました。二十世紀に入った瞬間に第一次世界大戦が始まった。それは当時では考えられないくらい、世界中を巻き込んだ、凄まじい戦争だったわけです。それが終わったと思ったら、今度はナチスドイツの足音

がだんだん近づいてきた。そしてまもなく人種差別に裏打ちされた全体主義体制が世界を覆う形になって、第二次世界大戦に入りました。ここでまた第一次大戦を上回る大変な戦争になって、とうとう核兵器までが使われました。そして、これが終わったと思ったら今度は冷戦です。

第二次世界大戦の前にロシア革命というのがありました。これは西側の世界にとって非常に不吉な革命でした。結局二十世紀は、このロシア革命とそれによって生まれた新しい社会主義という名の、実は社会主義という名を借りた全体主義体制と、もうひとつ、ナチズムという全体主義体制と、西側世界が戦うような形になりました。そして第二次世界大戦後は冷戦が続いてきたということです。考えてみると二十世紀というのは、そういう意味ではききな臭い大変な世紀だったわけで、十九世紀の世紀末の予感というものは当たっていたわけです。

今また二十世紀が終わるこの世紀の変わり

目に、恐らく皆さんも来るべき二十一世紀というのはどういう時代なのだろうかと不安にお感じになっていると思います。しかし逆に言うと、今置かれている私達の時代というものは、先ほども申しましたように、人類の歴史の中でそう滅多にやってこないくらい、大変な大変革期、変動期であります。二十一世紀は一体どういう時代になるのか。私も長生きして、この世界が、そして世界の中で日本がどのようになっているかを一見したい。大変スリリングな状況時代にあると思います。

皆さんはそういう意味でも歴史の証人としても、また歴史を自分の手で築いてゆく世代として、非常に幸運な時代に生きておられると思います。

つい先頃、一九八九年から九一年にかけてソビエト連邦が崩壊しました。世界はドイツの統一とか、あるいは東ヨーロッパの共産党政権が次々に倒れました。そしてとうとうソビエト連邦という巨大な超大国が崩れて、ようやく冷たい戦争が終わった。世界全体を巻き込む全面核戦争の脅威もなくなった。平和な時代がやってきた。自由と民主主義を謳歌する、そういう世界がようやくやってきたというような、一種の喜びというか歴史的な喜びを世界の人が、西側の人々が味わったと思ったのです。

この喜びの感情を西側の一部では EUPHORIA と呼ばれました。EUPHORIA という言葉は辞書で引きますと非常に難しい言葉で、多福主義とか、過福主義とか、要するに余り根拠のないことですから浮かれていて、幸せの気分になっている状況を言います。というのは、確かに冷たい戦争が終わって、自由主義陣営と共産主義陣営の核兵器をお互いに突きつけ合いながらの危険な世界の構図というのは崩れたのですが、実は冷戦によって何とか支えられてきた安定的な世界の秩序みたいなものが、逆にガタガタと崩れ始めてきたんです。

それは湾岸戦争であったり、あるいは旧ユーゴスラビア・ボスニア・ヘルツェゴビナの悲惨な民族紛争であったり、あるいは中央アジアやカフカスなど、旧ソ連で血を洗う民族戦争が起きたり、更にお隣の北朝鮮に見られるように核兵器の拡散という現象が起きてきています。かつてはアメリカとソビエトという超大国が世界の警察官のような立場で押さえ込んできましたけれど、それが押さえきれなくなると手に余ってきている。そういういわゆる世界の秩序がガタガタと崩れ始めて、これまで戦後私達が当たり前のことと考えていたことが、当たり前でなくなる状況が出てきました。

世界がこのまま二十一世紀に突入してい

た場合に、一体どのような時代がやってくるのか。非常に不安定な時代に入ってきていると思います。決して、冷たい戦争が終わって良かった、あの恐ろしいソ連が終焉して良かったというように手放しで喜べないような世界が今日の状況です。

十九世紀の終わりに、非常に不安な予感というのが的中して、二十世紀になって民族主義の嵐が吹きまくったのと同じように、今、二十世紀の終わりに世界を彩っているのは、明らかに新しい民族主義の紛争の時代だと言えると思います。

そこで、最近、これからの世界はどうなるかということ、アメリカやヨーロッパ、日本などで色々な予測が出ております。

例えばロンドンエコノミストという雑誌があります。例えは、今年の暮れから今年の始めにかけて二回に渡って、これからの世界を展望する一つのシナリオを紹介しました。

これは、国際的にも話題になりました。歴史学者が今から一千年経ってから今日の世界を振り返って見た時に、どのような歴史を書いていくかということ、想定したシナリオです。

それによると、二十一世紀は我々が冷戦が終わって期待しているような時代とは全然違う様相を呈するであろうと予想しています。どうということかという、冷たい戦争が終わって良

かった、新しいこれからの世界の秩序を作ろうということになった。けれども、世界の新しい秩序を作る三本柱のアメリカとヨーロッパと日本が、いずれも新しい国際秩序を構築するための協力協調を忘れて、それぞれに自分の立場を主張する。それによって、とうとう二十一世紀における新しい世界秩序の構築に失敗してしまう。そういうシナリオであります。

これは、今日日本では米市場の開放の問題で大騒ぎになっておりますけれど、これも絡みまます。果たしてウルグアイ・ラウンドが本当に成功するか、これは世界の歴史から見れば小さな問題かもしれませんが、象徴的な問題であります。結局このシナリオによると、新しい世界秩序の構築に失敗して、二十一世紀というのは恐らく中国と、もう一つイスラムの新しい勢力圏の二つが世界を牛耳ることになるだろうと予測しています。

今のアメリカやヨーロッパや日本の経済的な繁栄は、部分的な不況はあっても大きな意味ではやはり最も富める国々の集団であります。そのような状況から見ると想像しにくい話ですが、ロンドンエコノミストの予想では、中国は今の経済成長を維持していつて、二十一世紀の初め二〇二〇年〜二〇三〇年ぐらいには経済大国になる。経済大国であるだけに、政治的な力も国際的につくであろう。それから軍事力もま

すますつく。そのためにアジアの政治状況は大きく変わって、日本国内では中国の脅威に対抗するために核武装の問題が起きる。そして結局日本は核武装する方向に向かおうとする。けれども、その時には日本と中国の実力の差はあまりにも大きくて、中国は横浜の沖合の上空に核弾道ミサイルを一発爆発させて、日本はこれによって核武装の道を諦めることになると思っています。

更に、日本は中国にとって便利な都合の良い商品を提供する、香港のような、ヨーロッパにおけるスイスのような国。経済的に豊かな国であり続けるが、国際政治面ではほとんど発言力のない中小国にとどまるだろうと予測を立てています。

この予測によると、中国とイスラム圏、特にサウジアラビアが新しいイスラムアラブ共和国を作って、周辺のイスラムやアラブの国々を皆結集して強大なイスラム・パワーを作り上げる。これが今のロシア南部のイスラム圏をも吸収する。中国は中国で、シベリアをもう一度取り戻すという形で浸食して、世界の再分割が行われる方向に進むであろうというような、不吉なシナリオを書いていきます。

もちろん世界がこの通りに行くかどうかということは全く分かりませんが、実際日本がそのような国に落ちぶれてしまうかどうかもよ

く分かりませんが、ヨーロッパの知識人の間に日本に対するそうした見方があることは事実です。これは一種の願望かもしれませんが。これが最近話題になっている、二十一世紀のシナリオの一つであります。

もうひとつは、これも国際的に話題を呼びましたが、フランシス・フクヤマというアメリカの政治学者がいます。ブッシュ政権の頃は國務省の政策企画局の次長をやっていた、現在はラウンド研究所の顧問をやっている優秀な政治学者です。この人が『歴史の終わり』という論文を書いて、世界中の学者や政治家の間で大変な論争を巻き起こしたことがあります。

その主旨は、ソビエトの崩壊によって、いわゆる我々の歴史は終わった。世界は、皆自由主義と民主主義と市場経済の方向へ全部向かっていく時代が来た。つまり、二十世紀は最初はナチスドイツを中心とする民族主義的な全体主義と戦って、これを自由主義世界が打ち破った。そして第二次世界大戦以後は、共産主義という全体主義イデオロギーと、あらゆる軍事力と経済力で戦って西側陣営は勝った。これで西側の価値基準である民主主義と自由主義が世界を凌駕し、世界の方向は皆ここに行くのだから歴史は終わったのだというような論文です。これが賛否両論大論争を巻き起こすことにな

つたのです。

そのフランシス・フクヤマさんが、最近、アジア太平洋における二十一世紀とはどういう世紀かという予測を立てています。これがまた非常に面白いというか、大変に常識的なものです。その予測によると、やはりこれからのアジアを決定づける要素は、まず第一は中国であると言っています。これは、ロンドンエコノミストの見方と非常に似ています。

やはり、近年における着実な、そして凄まじいスピードの経済発展を踏まえて、恐らく中国は、二十一世紀の初頭にはアジア太平洋の鍵を決定的に握る存在になるだろう。

そして日本は一体どうなるか、果たして今のような状況を維持していけるのか。いやできない。そうなると、戦後ずっと日本が基調としてきたアメリカとの同盟関係はどうなるか。これは第二次世界大戦で日本がアメリカに敗れた結果生まれた、ごく過渡的なものであって、長い歴史から見れば、いつまでもびつたりとした同盟関係でいるはずはない。日本は自立の道を歩むことになるのではないだろうか。これがまた問題になる。

そして三番目は、アメリカがどうなるか。アメリカは恐らくこれまでのように、アジア太平洋のことについて、全て自分が取りしきるといような方向はもう取れなくなるだろう。だん

だん内向きになって行くだろうと予測しています。それは最近のAPECの会議などを巡ってのアメリカの動きを見ると、非常によく分かります。

四番目は、朝鮮半島の問題で、その中でもやはり中国の問題を重視しています。今のような経済発展をしながら、鄧小平体制下の中国は、経済は市場経済でどんどん発達させるけれども、中の政治は依然として共産党の一元独裁体制を強権によって維持していく。果たしてそれが続けられるだろうか。つまり、中国という国が今のような形で豊かになっていくだけで済むのだろうか。恐らく豊かになっていけば、人々の教育程度とか教育水準が上がる。そして外に知識、情報を求めようとする知識人の拡大が進めば、今のような政治体制をいつまでも維持することができるとかという問題を投げかけています。

それから更に、中国という国はもともと一つのセンター、例えば北京なら北京というセンターが一枚岩で完全に結束するような、地政学的な条件を持っていないので、これは分裂の方向に行くかもしれない。

あるいは、うまくいくと今度は大変なパワーとなつて、周辺の日本を含むアジア太平洋の国々を振り回すような力を発揮することになるのではないかと予測しています。

私は、ロンドンエコノミストやフランシス・フクヤマさんのこのような予測というのは、これからの世界を考える点で非常に示唆的であると思います。それでは日本はどうなっているのかという時に、私が最近面白いと思ったのはゼン・コーポレーション会長の堤清一さんがある雑誌でこう言っています。

「どうやら、日本は七、八年前から衰退期に入っているのではないか」。つまり、衰退の兆しが出ています。最近のバブル崩壊などにもその兆候は見えています。堤さんが衰退と言っている根拠の一つは、今の大学生は主体的に勉強するようになってきたけれど、日本を当面支える四十代の人たちが非常にだらしがないと言っているのです。この人達の考え方は、生活を楽しむという欧米型の生活スタイルや心情をそのまま自分達に受け入れようとしている。けれども、日本のように今なおストックが乏しい国がそのような様式をそのまま受け入れるのは、間違いではないだろうか。もしかすると手遅れになるかもしれないと言っています。

彼は、日本はこれまで経済大国だといって豊かになっているように見えるが、実は冷たい戦争の恩恵を一番受けた国であると言っています。つまり、自分の国の安全保障は全てアメリカに任せて、安い資源を使いながら経済発展を

遂げてきた。冷戦時代はそれで済んだわけですが、冷たい戦争が終わって世の中がすっかり変わってきた。これまでのような条件で、日本だけが発展だけを進めていけるはずはないと見えています。

私も、冷たい戦争が終わって世界の秩序が大きく崩れかけてきたことは、これからの日本を考える場合に、非常に重要な条件になってくるのではないかと見えています。そこで、これからの日本、あるいはこれからの日本を支えていく皆さんが、どのように世界と関わっていったらいいのかということについて、二つだけお話ししたいことがあります。これが本日の主旨です。

まず第一は、やはりこれからの世界は今までお話ししたように決して明るくなく、むしろ厳しい時代になってくると思います。我々の日常生活は、一見ものが溢れていて愉快で、日本のテレビやマスコミは浮かれておりますけれども、しかし、決してそのような状況でないことは実は誰もが感じているわけです。そういう中で、日本人は世界の中でどのように生きていかねばならないか。

第一点は日本人は理性的でなければなりません。常に冷静さを失わないことを心がけていくことが必要だということです。第二点は常に自分が世界を良く知っているなどと思つては

いけない。世界のいろいろな動向の本当のこと、裏にある本質をつかむことに努力することが必要だと思つています。

第一点の理性的でなければいけないという部分について、最近新聞紙上で読んだものでは非皆さんに紹介しておきたいと思つた記事があります。それは、慶応大学の政治学の中村勝範先生が十二月八日に産経新聞の「正論」にお書きになったものです。十二月八日という日は真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まった日でありますが、中村先生はこう言っています。

「あの十二月八日を今振り返つてみると、自分は少年だったけれど、やはり大変な興奮を覚えた。その日の朝NHKのラジオで『日本陸海軍は十二月八日未明をもつて西太平洋で米英軍と戦闘状態に入れり』という大本営の発表があったが、その放送を聞いたとき日本国民は皆興奮した。中には宮城(きゆうじょう)に駆けつけた、或いは靖国神社へ駆けつけた」。

その時日本の知識人達が、どのような談話を発表したり文章を書いたかということを縷々紹介しています。

中村先生はこう言っています。「戦争が終わつた直後、日本の言論界、思想界とか、日本の社会、マスコミの基調というのは、新しい時代は社会主義の時代であるというような風潮が蔓延した。ところが、それをリードした人達、

例えば若い世代や学生たちが崇め奉つて熱狂した清水幾太郎さんとか、穏健な法律学者とか国際法の権威とか或いは文学者が、あの一九四一年十二月八日の開戦の日に、積年の米英や西洋に対する鬱憤が一举に晴れたというようなことを、皆興奮して言っていたのです」。

中村先生は、振り返つてみるとあの時の日本国民はことごとく陶醉状態で、興奮状態に駆られていた。自分は小学校六年生であつたが、自分が味わつたと同じようなことを皆感じたと言っています。

しかし、一国の運命というものを考えた場合に「韓信」にならないといけない時があるのではないだろうかと言っています。

韓信というのは、中国の二千年も前の歴史書である「史記」の中に司馬遷が話を載せています。皆さんも「韓信の股ぐり」として聞いたことがあると思いますが、韓信は中国の歴史書の中では最も偉大な国と言われている漢を支えた二人の武将のうちの一人です。

この韓信が若い時に、町中で屠牛の少年に言いがかりをつけられて、お前は長い刀を下げて威張つて歩いていけるけれど、その刀で俺を殺すだけの度胸があるか、切つてみると言われる。しかし韓信はぐつとこらえて、彼の要求通りに彼の股をくぐるといふ辱めを受けるのです。後に彼は国家を支える軍事指導者になるのです

が、中村先生は「太平洋戦争の時に日本は韓信になれなかった。あの時どう冷静に考えても日本が米英に勝てるはずがなかった。そんなことは子供でも分かるような状態であつたにも関わらず、半世紀前の日本人は韓信になれなかった。自分達は正義の戦いをやつてると思い込んでいた。しかし、今の我々は韓信になれるであろうか」と問いかけて終わっています。

日本は数十年の経済発展によって、大変な経済大国になってきた。昨今の政治風土や社会風土を見てみると、余りにも自分の力を過信し始めているのではなからうか。自分の実力や世界の客観的な状況を知らないで、韓信になれない危険性が出てきているのではないかというところが、私の申し上げたい第一点であります。

つまり、大局を理性をもって冷静に振る舞えることが、これからの日本人には必要です。それは冒頭から申したように、二十一世紀における日本を取り巻く世界状況は大変厳しいものであつて、ロンドンエコノミストが日本の将来を決して明るく描いていない事実も知るべきです。エコノミストの予測はもろろんオーバーな表現であるし、実際の日本の姿とは違ふと思ひますが、やはりそのような見方もあるということを知っていかなければいけないのではないかと思ひます。

第二点は、我々は国際化の時代を迎えたとか、

或いは日常、テレビや新聞などを見て、国際情報が非常に多いので、何か世界のことがだんだん分かつてきている気になっています。それから外国旅行が当たり前の時代になって、グアムへ行ったりアメリカやヨーロッパや東南アジアを旅行したりすると、何となく世界が分かつてきたような気分になる。しかし実際は、世界の状況について表面的なことしか分からないで、分かつたような気分ではないのか。

これからの若い皆さんが、世界の中で日本を堂々と引き伸ばしていくためには、本当はその表面的な世界を知るのではなくて、世界の動向の本質を絶えず見ていく努力をされなければならぬのではないかというのが第一点です。

私は割合長く関わつてきたロシア問題についてお話しする機会がありますが、そうした折私はよくロシアという国の本質部分を把握する重要性を申してあげております。

ロシアは、九一年のクーデター失敗事件とか、その後のソ連邦の崩壊、更にエリツィン体制におけるいろいろな問題があつて、世界的に注目されていて、ここ数年、日本でも新聞、テレビ、雑誌でロシアのことは扱わない日はないくらいです。

確かに世界がロシアに注目しているのには根拠があります。世界が歴史的な大激動期にな

っているきっかけはロシアでした。つまり、八五年にゴルバチョフという若い指導者が現れてペレストロイカを始めたことがきっかけになって、世界はあれよあれよという間にドイツが統一したり、東ヨーロッパの国々が次々に共産党政権を倒しました。そしてとうとうソ連邦という超大国が崩壊することで冷戦が終わる。世界的な激動のきっかけが皆ロシアから生まれてきたということから、我々がロシアに関心を持たざるを得なくなつてきています。

そして先進七カ国が毎年首脳会議を開いておりますが、ここ数年は常に対口支援に取り組んでいます。それは、ロシアの国内問題が、陸続きであるヨーロッパの国々にとつて、自分達の国の安全に直接関わつてきているため大騒ぎしているということが、第二点としてあります。

日本は日本海を隔ててロシアをお隣の国と言つていますが、実は我々が隣として居るロシアはシベリアや極東であります。極東とはバイカル湖以東のことです。アメリカ国土の三分の二もある広いところなんです。そこにわずか七百万人しか住んでいない。そうすると我々の言っている「お隣のロシア」というのは、ほとんど人の住んでいないような所です。ところが、ヨーロッパが「お隣のロシア」というと、これは本物のロシアでありまして、ロシア人の主要な人

達はそのヨーロッパ部分に住んでいるわけですが。そこは核兵器が有り余る程多数残っていて、チェルノブイリ型のいつ爆発するか分からないような原子力発電所を抱え込んでいて、核廃棄物を海に放り込んだりする。

更に難民問題があります。巨大な旧ソ連邦で内戦が起きて難民があふれでてくることになったら、それこそ陸続きのヨーロッパの国々は目も当てられない。

日本は日本海を隔てていることもあるし、またお隣はシベリアや極東であつて、ロシアの混乱をいけば対岸の火事のように眺めているところがあります。しかし、このロシアの問題が今日の世界にとって重要な問題であることは皆さんお分かりのことと思います。

一体ロシアがなぜ混乱して今のような状況にあるのだろうか。エリツイン大統領が二度も訪日を中止したり、訪日したと思つたら、その直後に日本海に核廃棄物を投棄するようなことをする。ロシアというのは一体どのような国だろうかと疑問を持たれると思います。そのような問題を解くときに、ロシアという国の歴史をまず考えてみる必要があります。その歴史に裏打ちされた国民性とか社会の風土というものを考えてみる必要があると思います。それが分からないと、ロシアの行動はいつまでも謎で

あり、なかなか不可解で、とても我々がつき合つてゆけない国だと考えざるを得なくなると思えます。

ロシアの歴史を日本と比べると、歴史の浅い若い国です。有名な歴史作家である司馬遼太郎先生は、ロシアのことを「歴史が浅いが故にロシアには蛮性がある。ロシアには若いだけに猛々しい蛮性がある」と言っています。

そもそも、ロシアの国ができたのは九世紀といわれています。九世紀というのは、日本の歴史でいえば平安期が始まつていて、文学が栄え、豊かな日本文化が形成される時代です。

九世紀にロシアができたということは、日本の歴史が古事記や日本書紀に書かれているのと同じように、十三世紀にできた年代記に書かれています。その年代記によると、九世紀に今のチェルノブイリ発電所のあるウクライナ、キエフの周辺に住んでいた東スラブの部族が、自分達の代表団を北の国に送った。バルト海を越えて今のスカンジナビア半島、当時はバイキングの祖先であるノルマン人が住んでいたその部族のところに自分達の代表団を送つて、こう言つたそうです。「我らの国は広大で豊かな場所である。しかし我々は残念ながら秩序というものがないので、一つのまとまった国として統治することができないでいる。できたなら文化の高いいあなた方から誰か代表を送つてもらつて、

我々を統治して欲しい」と頼んだそうです。

この要請を受けて、ノルマン人の一部族であるリューリックの兄弟が、自分達の一族を連れて南に降りてきて、今のウクライナの辺りで一つの国家、社会を作つた。それがロシアの始まりであるキエフロシアが九世紀に誕生した所以であると、年代記に書いてあります。

おおかたの世界の歴史書でも、ロシアという国の始まりはこの頃だと、年代記に基づいて言っていることです。他愛ないような話ですが、ロシアの性格を象徴しています。つまり、自分の国の起源を語っているそのような書物の中で「自分達は自分達を統治できないからこちらに来て我々を統治して欲しい」と、自分達が自分達の力で統治できない民族であることを歴史の中で認めている民族なのです。

最近、エリツイン政権下におけるロシアの動向を分析する学者のコメントの中に、やはりロシアは、市民社会の伝統とか、自治の伝統を欠いている、つまり自分で自分を統治していくシステムを作ることができない民族であるということが言われています。

九世紀に始まつたロシアは、十三世紀になると東の方からタタール人に攻められます。日本ではモンゴルと言つていますが、彼らが遊牧民として攻めてきてロシア全土を騎馬軍団で席卷する。更に東ヨーロッパや中部ヨーロッパ、

バルト海沿岸からアドリア海の方まで進攻します。ヨーロッパもかなり荒らされましたが、タタールの侵略で世界で最もひどい目にあったのはロシア人です。このためにキエフロシアはつぶれてしまつて、生き残つた一部の人が今のモスクワの方に移つてロシア国家の基を作るわけです。

十三世紀から十五世紀の二百四十年の間、ロシア民族の先祖達は、モンゴルの、タタールの圧制下に完全に組み伏されてしまいます。実はこれが後にロシアの歴史に決定的な影響を残すということ、世界の歴史学者が皆言っているんです。

十三世紀から十五世紀というのは、西のヨーロッパの歴史でいうとちょうど宗教改革とカルネツサンスとか、既に科学が発達し始めている。西の世界は決定的に歴史的な大変革を受けている時代に、ロシアは暗黒の時代の中で圧制下にありました。タタールの支配から受け継いだものは全体主義であつたり、或いは後のスターリンの粛清に見られるように血で反対者を打ち倒していく強圧的な政治のシステムであつたり、ろくなものを残さなかつたとよく言われるんです。

我々日本ではロシアというと、明治から大正にかけて日本人が憧れたロシア文化、チャイコフスキーの音楽とかチェーホフやドフトエフ

スキーやトルストイの文学に憧れたり、一時十九世紀の終わりから二十世紀にかけて世界でも第一級の飛び抜けてすばらしかつたロシアの文化、このイメージが強くて、ロシアというとヨーロッパの国であり白人の国であつてヨーロッパの一部のように見えています。実はロシアの歴史を振り返つてみて、ヨーロッパの人たちは、ロシアというものは彼らの世界から比べると非常に特異な国、自分達とは隔絶した世界の人たちと見ているのです。ここに、日本と欧米の人たちのロシアに対する視点がかなり違つてることが第一点として挙げられます。こういう歴史的な伝統というのが今のロシアにも脈々と息づいているような気がします。

第二に、私は最近のロシアの状況を見ていて、西側の世界、特にアメリカやヨーロッパがしきりにG7などを通じて、ロシアを民主主義或いは自由市場にする、一言で改革と言っています。が、エリツイン大統領を中心にこの改革が進められているということ、今にも我々アメリカ、ヨーロッパ、日本と同じような、同じ価値観の民主主義国家や市場経済になるのではないかと思いがちです。けれど、実はロシアの本質はそういうものをなかなか許してくれないんです。

私は市場経済の話をするときに、自分のモス

クワで八年くらい生活した経験をよく話します。

例えば、自分のアパートでガラス窓が割れたとする。皆さんの町だったら、当然ガラス屋さんに電話を入れればすぐにガラスは入つてしまふのだから、実に何でもなし話のようであります。けれども、実はロシアでは今なお、ガラス屋さんに電話を入れればガラス屋さんがきて、ガラスを入れてくれるシステムにはなつていないんですね。第一電話帳がないんです。旧ソ連時代の情報の閉鎖社会の伝統を受けて、いわゆる我々が電話帳というような電話帳はないんです。ガラス屋さんの電話番号なんて書いてないから電話なんてかけられない。じゃあ歩いていけばいいじゃないかと歩いていつて頼んでも、ガラス屋さんはそんなサービスをするようなシステムにはなつていないのです。

じゃあどうするか。そうするとロシア人は生活の知恵で、こういうときはどうするかすぐ思いつきます。

私のアパートだったら「あれはイワンだ」とこう思うんです。イワンというのは同じアパートの三号棟三階に住んでいる、近所の木工所に勤めている工員さんです。彼の家に夕方行きますと、彼は会社から帰つていて「いいでしょう、明日行きましょう」と翌朝来てくれる。もちろん会社は完全に無断欠勤です。これは他のロシ

ア人がやっておりますこととみんな同じことをやっております。彼は肩に大きな箱を担いでやってくる。その中に何が入っているかという、いろんな厚さのガラス材やのこぎりや、ガラス屋さんが持っている道具を一式全部持っている。ところが、これらは実は彼が毎日会社から帰るときに、少しずつくすねて家のため集めたもの、これがたまって彼の工具箱に整然と入れてあるのです。ロシアでは、旧ソ連時代からの伝統なのですが、大体九九パーセントが夫婦共稼ぎでお勤めに出ているんですが、この人達のほとんど大部分が自分が表向きに勤めている会社の仕事以外に必ずアルバイトをしているんです。それは必ず自分の勤め先の職種を活かしたアルバイトをやっている。

例えば、私の子供が高熱を発して、風邪で臥せった。ところが日本から持ってきたいい薬がもうなくなつて困つたといつたときにお手伝いさんが「任せて下さい」と言う。

後で分かつただけけれど、彼女は病院に勤めていた元看護婦さんだった。昔務めていた病院に電話を入れて、同僚が薬局の薬を届けてくれたんです。それでその同僚へのお礼は、自分のお姉さんが勤めているデパートから、最新のハンガリー製の婦人靴をまわしてもらつて病院の方へ持つていく。

旧ソ連時代だったら、国家財産が右から左へ、

商業ルートを通さないうで行ったり来たりしているというシステムになっているんです。まさにイワンのその手でガラスを入れてくれます。「お礼はいくらか」と言いますと、ルーブル紙幣なんてのは役に立たないからそんなものはいらぬ。ウオツカが一本とか二本とか、ウオツカがお金の代わりだと。

こういうシステムは、私が最初にモスクワの特派員をやつた一九六七年、今から二十何年も前から、ソ連邦が崩壊した今でも続いているんですね。

こういう経済のシステムを西側のヨーロッパの経済学者は、アンダーグラウンドエコノミー（地下経済）とか、セカンドエコノミー（第二経済）というような言い方をしています。もうソ連時代からだいたいソ連の経済の三分の一は地下経済、第二経済でまかなわれていただろうと言っています。最近のエリツイン政権下の経済の混乱の中で、ますますこの地下経済が肥大しつつあるわけです。

更にもう一つ例を挙げれば、私は一昨年、ソ連の本をよく書いてあるアメリカのフレデリック・スミス氏の『ザ・ニュー・ラッシュヤンズ』という本を訳して出しました。その中で、フレデリック・スミス氏が自分の好きなロシアの小話を紹介しているんです。

この小話もくだらない話なんです。会社で、ちやうど会社の引け時に従業員が次々に帰っていく。入り口で守衛さんの厳しいチェックを受けた後みんな帰っていく。ロシアも旧ソ連もそうですけれど、会社、図書館、学校、研究所、工場、どこでも、従業員や職員、或いは外来者の出入口というのは、非常にチェックが厳しいのです。この会社でも次々に従業員が列を作つて、守衛が厳しくチェックをしている。

そこへ、イワンが手押し車に白い布をかけてやってきました。守衛さんが布をどけて中を見たが何も入っていないので、「帰つてよろしい」と言つて、イワンは帰つていった。二日目の夕方、イワンはまた手押し車を引いて行列の中にやってきました。守衛さんが中を改めなければ何もないので「帰つてよろしい」と言つてイワンは帰つていった。三日目もまたまたイワンが手押し車を引いてきた。守衛さんは我慢がでさなくて「イワン。お前が会社から何かくすねようとしているのは分かつている。何を持って帰つてくるのか正直に言つてみる」と言つと、イワン答えて曰く「手押し車です」。イワンは手押し車を毎日一台ずつ持つて帰つていたという話なのです。

ばかばかしい話をするときリがないのですが、要するにロシアでは市場経済の伝統みたい

なものが全くなかったのです。エリツイン大統領はちょうど一昨年、いわゆる経済改革を始めるといふことで価格の自由化をすると国民に向けてテレビ演説をやったときに「これからは、我が国は市場経済になるんです。市場経済というのは、皆さんが働けば働くほど皆さんの懐が豊かになっていくシステムなんです。だから皆さん、しばらくはインフレになったり色々苦しむけれども、新しく素晴らしい市場経済を実現するために協力して下さい」という演説をやっているんです。しかし、今、イワンの経済を申し上げましたけれども、そういう社会でいきなり市場経済に行くわけがない。やはり多くの国民は、今のままの方が非常に楽です。だから、経済の混乱の中で、経済担当の大臣やエリツイン大統領自身がよくばやっています。とにかくこのロシアの経済で一番困ったことは、国中のありとあらゆる人間が、国家財産をみんなくすねようとする。そういうとんでもない社会であつて、これでは市場経済などにはなかなかなりつこない。何度も規則を厳しくしたり取り締まりをやるうとしたりするのだけれど、なかなか市場経済にならない。というのも、今申し上げたような長い伝統の中でロシアに築かれた、市場経済とおよそ程遠い彼らの生活習慣、労働心理みたいなものがあるからなのです。そして、民主主義の改革なんていってもなかなか本物

の民主主義の改革ができないのは、先ほど申しましたようなロシアの歴史に由来しているものであるという点を、やはり考えなければならぬ。

日露関係を考えるときに、我々はよくロシアをあまりにも同じ土俵の上で考えすぎてしまっています。そうすると、北方領土を戦後不法に占拠したまま、昔から自分達の領土であるかのようにな主張して日本の主張に耳を傾けない。都合が悪くなると、大統領の日本の訪問を二回もすつぽかすことが出来る。そして訪問した途端に、その舌の根も乾かないうちに日本の目の前で核廃棄物を平気で放り込んだりする。どうやらこの連中はまともな文明人ではないといううなことを言つて、日本中で皆憤慨する。

いわば我々は韓信ではなくても、ロシアに対してはどうしても厳しくならざるを得ないところがあります。しかしひるがえつて考えてみると、じゃあアメリカやヨーロッパはなぜ、対ロ支援やエリツインさんに対して熱心に援助をやるうと言うんだらうか。日本は、北方領土問題もあるけれどもあまりそう言つと、アメリカやヨーロッパの国々が日本は自分の国のことしか考えないと言つてうるさいから、しょうがないと渋々対ロ支援につき合つてやつています。けれど一歩引き下がつてよく考えてみると、

恐らくアメリカやヨーロッパの国々は、ロシアという国を日本ほど高い価値基準、或いは水準で考えてはいないのではないだらうかというところに思いをいたさないと、なかなか分かりにくい。逆に日本がロシアに対してあまりにも厳しい基準で考えていると、自分達と本来同じ水準、同じ仲間としてつき合つていくアメリカやヨーロッパという世界の人たちの考え方のギャップというのが、どんどん開いていくのではないだらうか。

もう既に今年の東京サミットの場合、日本の政府当局者はぼやいていました。「どうも日本とロシアの関係が悪くなると日本とアメリカの関係が悪くなる」。何とも理不尽な話であります。ちよつと一歩引き下がつてロシアという国の本質を考えてみると分かるような気がいたしますし、皆さんも分かっていただけではいかと思ひます。

私が縷々申し上げたことのまず第一点は、やはりこれから激動の世界の中で生き延びていく日本にとつて一番重要なことは、やはり自分や自分の力を過信するのではなく、冷静に客観的に自分の周りや自分の力や自分のある場所を判断できる理性である。そして、第一点は、自分の置かれている周りの状況、環境や自分を本当に知る、本質を見極める知識ではないかと思ひます。

願わくば、これから社会へ出られる四年生の皆さんは、それぞれの職場や社会で、大きく期待され、日常の業務や生活に忙しく奮闘されるだろうと思います。その多忙な中で、できれば絶えず読書をするという習慣をつけられるということ。それからもう一点、私が今日お話ししたこととちよつとお気づきになっていると思うのですが、世界を知ったり日本を知るにはやはり歴史を勉強するということがどうしても必要になってくるだろう。これからの長い人生の中で、なんだ読書だ、歴史だなんてつまらない、退屈だなあ、とお思になる方もいらっしゃるかも知れませんが、必ずやある一定の時間が経った後、そういう努力をしてきたことが良かったなあとお気づきになる時があると私は思います。

今日は、本当は何をお話しようかと思っただんですけれど、なかなか考えがまとまらなくて雑駁なお話になりましたけれど、以上を持ってお話を終わらせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

※当DVD収録の「講演録」には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。